



目次

▲研究

山出苗木の取扱に就て

▲雑報

學校記事

▲文苑

某甲先生奇行

傳

稽程一千日

たわこま

▲雑録

件々

日五十二月四年四正大

號六拾六第

(日五廿月每定)

(日十月七年二十四治明)

研究

山出苗木の取扱方に就て

西澤 静 人

抑々林業なるものをとして、最も経済的に保
 續作業を営むべきに關しては、其注意を要
 すべき方面多々あるべく即ち林地の揀定、
 樹種の選擇、輪伐期の決定、地方需用供給
 の關係、其他重要な事項等の調査攻究す
 べきことあるも、之れが事業實行に際して
 は尙森林相續者とも云ふべき、所謂苗木の
 取扱に就き最も肝要なり、而して茲に特に
 山出苗木の取扱方に就きて述べんとするは
 曰く造林の不成績は種々の事情に關係を有
 することあるも、山出苗木取扱の不注意に
 基因すること實際上多かるべしと思料す、
 然るに人或は言はん、如何に不成績の造林
 と雖も、翌年に至り三割乃至四割の補植を
 なせば即ち足る、斯くの如きは之を重利算
 として計算するも間伐主伐の収入伐期に於
 ける後價に比し實に九牛の一毛のみと、然
 れども試みに造林してより伐期に至る迄幾
 十年間或は天災に或は人爲に幾多の災難
 は、吾人林業經營者の前途を障碍する事を
 豫期せざるべからざるに非ずや、此事たる
 或程度までは實に免るべからざるものに屬
 す、故に免るべからざるものを免れんとし
 て徒勞に來するよりも、免れ得べき方面に

於て極力損害の度を低からしめ、免るべか
 らざる被害による損失を損はざるべからず
 之れ即ち出來得る限り經費の節約を計るに
 あり、又見よ我國は森林國として實に世界
 に誇るに足るべき林野面積の比率を有す、
 即ち全面積の五割以上を占む故に小面積に
 於ける九牛の一毛に等しき損失も此大面積
 に於ては果して如何なるべき、試みに左に
 今植栽經費並に後價算定表調製に關して
 要項を次の如く假定す

- 一、造林面積一町歩、一伐期齡八十年
- 一、利率年五分、一町歩三千本植栽
- 一、人夫賃五拾錢(以上)

一、後價とは資本を伐期に於ける價格
 に重利算を以て引直したるもの

經費目 金額 後價 備考

苗木代 九、〇〇〇 四、〇五三 三千本代一本參 厘山着

植付費 七、五〇〇 三七、七二〇 人夫十五人一人 五十錢ヅ、

計 八七、五三三

(乙)成績普通にして翌年一割の補植を要
 する場合

經費目 金額 後價 備考

苗木代 九、〇〇〇 四、〇五三 前表ノ通 八十年目の後價

植付費 七、五〇〇 三七、七二〇 人夫三人一人五 十錢ヅ、

苗木代 〇、九〇〇 四三、四八一 三百本代 一本參厘山着

計 九三、〇四六

摘要 補植費は七十九年目の後償とす (丙)成績不良にして翌年五割の補植を要する場合

Table with columns: 経費目 (Expense Item), 金額 (Amount), 後償 (After Payment), 備考 (Remarks). Rows include 苗木代 (Seedling Fee), 植付費 (Planting Fee), 補植費 (Re-planting Fee), 苗木代 (Seedling Fee).

右表により成績良なるものと不良なるものとの後償の差は、僅が一町歩に對し實に四八四一三となる、今假りに我國の人工造林を行ひ得べき林野面積を二千万町歩とせば、此全面積を造林し八十年伐期に至りし時の後償に於て、無慮八九、六八二六〇、五〇〇〇〇〇の徒費を生ずる事となる、豈恐れざるべけんや、斯くの如く造林成績の如何は其結果に對し至大の影響を及ぼすものにして、時將に春季造林事業の期に入るを以て、本問題に就き愚見を述べんとす

第一、苗圃に於ける注意

凡そ造林するに當りては、先づ苗圃にある苗木を如何にして山地に運搬すべきやを研究すべし

一、根部の損傷を少くし乾燥を防ぐ事 根部の損傷を少くするには鋭利なる鋏を深く打込みて掘取り決して根の柔軟部に龜裂

を生せしむべからず、又根部の乾燥を防ぐには探苗小屋を設置するを良とす、此小屋も日光の射入及風の侵入を防ぐ爲めなるに依り、作業に差支なき限り低く且風の吹き來る方向に斜狀に設くるを可とす

二、人夫の配置を適切ならしむる事 人夫の技倆並に其配置は仕事の巧拙及功程に關係する事大なり、殊に人夫の配置は重要なる事にして掘取人夫が探苗人夫に比し過多なるときは苗根を乾燥せしむる恐あり

三、荷造りを完全になす事 荷造りは掘取探苗と相俟ちて重要な仕事なれば熟練せる人夫を撰定すべし、就中山地に適當なる假植地のあらざる場合又は遠距離に運搬する場合は特に叮嚀に荷造りすを要す、即ち苗木を三十本乃至五十本に結束し(春季温暖なる時にありては運搬中蒸熱を起す恐あるものなれば可成結束の數を少くするを可とす)之を根部と根部と相合せ、豫め粗造りするが爲め用意したる藁の上に列べ通常一荷の本數を五百本乃至七百本とし根部には濡苔を以て覆ふか、又は如露にて根部に水を注ぎ之に細土を振掛く斯くして之を三ヶ所々に依の如く結束し、更に其上を藁にて覆ひ又三ヶ所々にし荷造りとす

四、探苗を充分になす事

探苗は樹形正しく力あり、且根と枝葉の均衡せるものにして損傷なきものを撰ぶ、又

其大さの範圍は成べく一定するを要す、是れ荷造りに當り一荷の本數に非常の差異を生じ、取扱に不便なるを植付たる後生長の不整を來すを以てなり、故に山出苗木の大さは樹種等に依り異なるも通常尺以上尺六七寸位を適當とす、補植の場合は是以上の大苗を植ゆることあり、

第二、運搬途中に於ける注意

近距離にありては監督者をして運搬途中を監視せしむるを良とす、若し人員の都合上之をなす能はざる場合には、信用あるものに運搬をなさしむる様にし、又運搬は可成同一種の運搬法を以てするを安全とす、之れ途中に於て運搬方法を變換するときは積荷の都合上完全なる荷造りしたるものを解束折半するが如き事往々之あればなり、然れども遠距離の運搬に於ては到底同一種の運搬法を行ふことを得ず、此場合には運搬方法を變換する地点に於て嚴重に監督するを要す、彼の汽車輸送の如き取扱をなすときは、蒸熱の爲めに殆んど全部枯死せしむる事あり注意せざるべけんや

第三、山地に於ける注意

苗木到着したるときは細土多き所に叮嚀に荷を解き苗木一本毎に根部に細土が密着する様にせざるべからず、若し山地及其附近に適當なる假植地を見出さざる場合には荷造りの儘一列に列べ二晝夜を経過せしむるも差支なし、此法は前述の如く完全なる荷

造りをなしたる時に限る、而して山地に於ける苗木假植地定まりたる時は丁寧に假植し置き植付に際し此所より運搬して人夫に交付し又交付に際しては細心注意して植付人夫一人毎に吠の如きものを携帶せしめ一回三十本乃至五十本を限りとして交付し嚴重に監視して一本宛植付に際し吠の中より取り出し植付けしむるを要す 要するに苗床に於て養成したる根部を損傷せしめざる様、又乾燥せしめざる様周到なる注意を拂へば足る、徒に其取扱法の丁寧なるをのみ尊ひ、經費の點を等閑になすが如きは吾人の取らざる所とす、所謂生魚を取扱ふ心持を以て出來得る限り經費を省き完全に植付を了するに在り、而して余が理想の方法としては年々大造林を行ふにありては出來得る限り、苗圃を一ヶ所に集め設備を完全にし、苗圃には専門の技術者を常置し苗圃にては一回若くは二回床替即ち山出苗木の前年までをなして、直ちに山地又は其附近に運搬し其所に移植苗圃を設け移植し置き、翌年此所より運搬して植付くるを便利且安全なりと信す、斯くすれば運搬費を減じ苗木小なれば取扱も容易に且植付に際し、氣候一致せる所にあるを以て活着も良好なりと思慮す(完)

學校記事

○學年試驗 三月八日より始れる該試驗は

十七日午前中を以て全く終了し二十二日正午に至り卒業進級共に成績の發表を見たり ○證書授與式 三月二十三日、午前十時より本校第十二回卒業證書授與式舉行せられたり。先づ生徒職員來賓の順を追ふて着席するや校長舉式の旨を告げられ一同音吐朗かに國歌を合唱し次いで勸語捧讀、北村教頭の學事報告あり。次に校長は左記四十四名の卒業生に對し夫々證書を授與し尙各級優等生、皆勤及精勤者には賞状を付與したつて一場の訓示を與へられたり。知事代理として臨校せられたる安藤林務課長は告辭を朗讀せられ、來賓清水本郡視學は松下郡長の代理とし、信越新聞特派員近藤忠三郎氏等の祝辭あり。在校生總代古畑秋藏君送辭を朗讀するや卒業生總代都竹武次郎君の答辭朗讀ありて後一同校歌の合唱をなして閉式せり。因みに當日の來賓は前記安藤林務課長を始めとし清水本郡視學、下村新聞村長福島在住各新聞記者其他十數名ありき知事告辭、在校生總代送辭、卒業生總代答辭及來賓祝辭次の如し。

告辭

長野縣立木曾山林學校第十二回卒業證書授與式ニ當リ一言論クル所アラントス 惟フニ時運ノ隆昌ニ伴ヒ帝國經濟ノ伸暢ハ林野ノ開拓整理ヲシテ忽諸ニ附スル能ハサラシムルモノアリ 茲ヲ以テ近年我林業ハ其ノ進歩較ニ觀ルニ

足ルモノアリト雖モ之ヲ國家百年ノ計ニ願ミハ其ノ前途猶遠遠ナリト謂ハサルヘカラス而シテ今ヤ諸子本校ノ課程ヲ終リ將ニ出デ、實務ニ就カントス 國家力諸子ニ俟ツモノ豊少ナラシヤ 諸子ハ今後宜シク其履習セル所ヲ執テ之ヲ實際ニ施シ勤勉力行益々精練ヲ加ヘ常ニ本校教養ノ趣旨ニ副ヒ以テ國運ノ進歩ニ貢獻スル所アルヲ期スヘシ諸子ソレ旂ヲ勉メヨ 大正四年三月二十三日 長野縣知事正五位勳四等 力石雄一郎

送辭

大正四年三月二十三日茲ニ本校第十二回卒業證書授與ノ盛典ヲ舉行セラルル等ノ榮想フヘキナリコレハ諸先生ノ懇篤ナル薫陶ト一ハ兄等カ螢雪三星霜刻苦研鑽セラレシノ功タラズンバアラズ抑々吾林業界ノ現狀ハ近年頗ル急速ノ進歩發展ヲ遂ク今ヤ漸ク多忙ヲ極メ、治山ニ治水ニ到ルトコロ其人ヲ望メリ行クヤ諸兄而シテ其鍛鍊セル手腕ト頭腦トヲ縱横ニ發揮シ以テ吾林業界ニ貢獻セラレヨ 飄ツテ思フニ兄等ハ生等入學以來實ニヨク生等ヲ導ケツ諸兄ノ恩ヤ深ク其ノ愛ヤ大何時ノ日ニカ之レヲ忘レン然ルニ今ヤ袂ヲ別タントス惜別

ノ情ヤ何ゾ堪ヘン兄等冀クハ校ヲ辭シ
遠ク去ルト雖モ時アリテカ思ヒテ母校
ニ走セ生等後進ノ向フ所ヲ知ラシメヨ
生等亦兄等ガ遺セシトコロノ美風ヲ繼
承シ益々校風ノ發揚ニ力メ敢テ兄等ノ
後進タルニ恥チサランコトヲ期ス別ル
、ニ臨ミ感極ツテ幾ント言フ所ヲ知ラ
ス在校生一同ニ代リ蕪辭ヲ陳ベ以テ送
辭トナス
大正四年三月二十三日
長野縣立木曾山林學校
在校生總代 古畑 新藏

答 辭

荒涼タル三冬既ニ去リ今ヤ陽春ノ佳季
ヲ迎ヘントスルニ際シ茲ニ本日ヲトシ
テ生等四拾有四名ノタメニ卒業証書授
與ノ盛典ヲ舉行セラレ 知事閣下ヲ始
メ來賓各位ノ臨場ヲ仰ギ 知事閣下ノ
告辭校長先生來賓各位ノ訓辭並ニ在校
生諸君ノ送辭ヲ辱ウス生等ノ光榮何物
カ之ニ若カン
願ミレバ生等ノ志ヲ立テ、本校ニ入リシ
ヨリ早クモ三歳ヲ閱セリ而シテ當初頑
鈍ニシテ事理ヲ辨ヘズ拙陋ニシテ禮儀
ニ嫻ハザリシ生等ハ諸先生ノ懇篤ナル
教訓ト周到ナル指導トニヨリ日ニ蒙ラ
啓キ月ニ德ヲ研クテ得テ今ヤ三年ノ課
程ヲ了ヘ羽翼聊カ就リテ今ヨリ社會ニ

祝 辭

本日本校卒業証書授與式ヲ舉行セラル
洵ニ慶賀ニ勝ヘザルナリ
惟フニ我林業ヲ振興シテ國家ノ發
展ニ伴ハシムルハ一ニ新進有爲ノ士ニ
俟ツ今ヤ卒業生諸子多年ノ溫蓄ヲ提テ
テ新林業界ノ人タラントス諸子ノ前途
多望ニシテ其責モ亦重シト謂フベシ若
シ夫レ學ヲ勵ミ經驗ヲ積ミテ日新ノ進
歩ニ後レズ德ヲ磨キテ品性ノ向上ニ努
メ以テ根本ノ修養ヲ怠ラザルガ如キハ
蓋シ諸氏ノ日夕懷フテ忘レザル所復何
ゾ他ノ提撕ヲ俟ンヤ
冀クハ熱誠以テ事ニ從ヒ效果ヲ多年ノ

祝 辭

後ニ舉ゲ國家ノ期待ニ背カザランコト
ヲ一言以テ祝辭トス
大正四年三月二十三日
西筑摩 長從七位 松下 金六
茲ニ本日ヲトシ本校第十二回卒業証書
授與式ヲ舉ゲラレル、ニ當リ一言以テ
祝辭ヲ呈スルノ機會ヲ得タルハ余ノ最
モ光榮ニシテ又欣喜ニ堪ヘザル所ナリ
凡ソ森林ノ繁盛ヲ計リ林業經營ノ完備
ヲ期スルハ即チ林業界ニ從事スル者ノ
責任ナリト信ズ然ルニ卒業生諸氏ハ入
學以來三星霜一日ノ如ク教員諸氏ノ懇
篤切實ナル薫陶ト研學勵精ノ効果トニ
依リ既ニ林業ニ關スル學業ヲ修得シ今
ヤ社會ニ立チテ將ニ實務ニ從事セラレ
ントス其榮譽ヤ實ニ大ナリト雖モ蓋シ
其責任重且大ナリト云フベシ况ヤ世路
ハ常ニ艱難ニシテ學海ニ尙遠達ナリ須
ラテ所修ノ學業ヲ實地ニ施シ一層精神
ノ涵養ニ努メ其責任ヲ重シテ誠心誠
意事ニ當リ益々拮据勉勵シテ林業ノ進
歩發達ヲ補益スル所以ノ實ヲ舉グルト
共ニ他日ノ成功ヲ期セラレンコトヲ切
ニ希望シテ已マザルナリ茲ニ卒業生諸
氏ノ前途ヲ祝福シ併セテ本日ノ光榮ヲ
長ヘニ全ウセシメラレンコトヲ望ム
大正四年三月二十三日
信越新聞特派員 近藤忠三郎

第十二回卒業生氏名及本籍(いろは順)

- 岐阜縣 伊藤 喜代
- 岐阜縣 伊藤 正之助
- 愛知縣 池田 仲治
- 更級郡 池野 万次郎
- 岐阜縣 飯沼 要人
- 南安曇郡 稻葉 増吉
- 岐阜縣 今井 眞二
- 西筑摩郡 林 勘治
- 西筑摩郡 早川 一雄
- 西筑摩郡 原 貫三
- 南安曇郡 等々力 爲一
- 西筑摩郡 千村 萬三
- 上水内郡 荻原 惠治
- 西筑摩郡 加藤 朝太郎
- 北佐久郡 唐澤 俊文
- 下伊那郡 吉川 眞夫
- 西筑摩郡 田近 善右衛門
- 滋賀縣 田中 泰吉
- 岐阜縣 種倉 隨藏
- 西筑摩郡 竹原 久治
- 岐阜縣 都竹 武次郎
- 下伊那郡 東 原 智
- 南安曇郡 中村 五郎
- 東筑摩郡 中 田 穰
- 南安曇郡 長崎 千一
- 更級郡 野澤 博
- 鳥取縣 恩田 司馬之助

小縣郡 大森 悅治

- 下高井郡 黒崎 洋治
- 更級郡 柳澤 得衛
- 埴科郡 柳澤 止之進
- 西筑摩郡 安井 嘉一
- 西筑摩郡 丸山 岩吉
- 岐阜縣 松川 久吉
- 西筑摩郡 松上 三郎
- 下伊那郡 松澤 敏男
- 京都府 藤枝 茂
- 埴科郡 小崎 次郎
- 北安曇郡 小林 英一郎
- 岐阜縣 近藤 幸吉
- 岐阜縣 安藤 藤吉
- 埴科郡 新井 彌藏
- 下伊那郡 宮澤 功
- 南佐久郡 水上 壯三

同上精勤者 宮川昌平、長谷部久雄、古畑

- 新藏、山崎兵平、小池茂樹、小松良輔、
- 第一學年優等者 岩田元吉、長坂清人、宮
- 嶋岩見
- 同上皆勤者 長坂清人、伊深榮太郎、安江
- 悦次郎、山下不二三、宮嶋岩見、小田實
- 榊原武重、原治二、小岩井茂樹、丹澤潔、
- 岡田壽、皆川秀雄、赤羽三郎
- 同上精勤者 各務傳六、曾我義郎、藏尾真
- 富士川鏡一
- 卒業生送別會 式後午後一時より校友會
- にては卒業生の送別會を開催し川口勇次郎
- 君の開會の辭に次ぎて七宮會長、前校長安
- 藤先生、島内教諭其他生徒數名の送別演説
- あり。それらに對し田近善右衛門君一同を
- 代表して感謝の辭を述べ最後に川口君及び
- 田近君の音頭により卒業生及在校生の萬歳
- を相互に三唱し萬歳聲裡に閉會せしは午後
- 一時半なりき。
- 紀念撮影 校友會の送別終るや否や職員
- 及卒業生は玄關前に於て紀念の撮影をなせ
- り。
- 卒業生謝恩會 紀念撮影後卒業生は謝恩
- 會を催し田近善右衛門君一同を代表して多
- 年教養の恩義を謝し之に對して七宮校長の
- 挨拶あり北村教諭は卒業生を山に移されん
- とする苗木に比し巧妙なる比喩を以て前途
- を戒め尙此席にもり連し安藤先生の處世の
- 要訣談等ありて師弟和氣藹々の裡に散會せ

○始業式 四月一日午前九時を以て舉行校長より前學年度成績及之に對する注意、本學年の方針等に關し訓示あり式後各學年の實習組別をなし同時に組長副組長並びに各學年級長副級長を互選したり

- 第三學年級長 川口勇次郎
同 副級長 下平佐門
第二學年級長 宮嶋岩見
同 副級長 岩田元吉
第三學年實習組長 同 副組長 同 副組長
第一組 澤田 富可 柘植 五郎
第二組 加茂憲太郎 百瀬 三一
第三組 矢島 武六 下平 佐門
第四組 千村彌之助 竹村 節三
第五組 川口勇次郎 坂本光太郎
第二學年實習組長 同 副組長
第一組 松島 長二 小澤 武
第二組 藏田 毅郎 原 治 二
第三組 岩田 元吉 岡 田 壽
第四組 各務 傳六 出雲 秀一
第五組 宮島 岩見 長坂 清人

- (部名) (部長) (副部長)
庶務部 川口勇次郎 竹村 節三
辯論部 坂本光太郎 下平 佐門
雜誌部 加藤源一郎 矢島 武六
擊劍部 加茂憲太郎 長谷部久雄
弓術部 千村彌之助 福澤 定雄
庭球部 千田 政美 原 正 造
遠足部 古畑 秋藏 梅村 計介
○春期實習開始 氷解く風もゆるく吹きて枝を鳴さず、谷の鶯も行末はるかなる聲に聲えて春風駘蕩の好期はまさに本校實習の大繁忙期と云ふべし。四月二日よりは二三學年とも苗圃に向ひ樹苗の掘取良否の撰別假植に整地に各着手し殊に從來空地たりし果樹園東の原野を開墾して櫻樹及其他の樹木を植付け改元紀念園となすなど頗るいはがはしげに見ゆ、加ふるに生徒は近來益々熱心に眞面目に全力を以て作業に當るの概ありてよその見る目も羨ましき許なるは快心の極といふべし

○卒業生來校 今回盛岡高等農林學校に入學許可の榮を得られたる第九回卒業生山村克人君は七日に、十日には第十一回卒業生岩瀬幸吉君及今春卒業せる田近善右衛門君東原智君、近藤幸吉君等は各任地赴任の途次を以て立寄られたり。
○進拜式 十一日は、昭憲皇太皇御崩御一周年に相當せるを以て職員生徒一同は講堂に參集西桃山の方を伏し拜み校長の祭詞に新しき哀愁を催し折からの春雨に轉々思世の涙をそゝがしめぬ
○入學式 入學試験考査の結果受験者七十六名中五十六名の者に對し入學を許可し十五日午前九時より講堂に於て入學式を舉行せり生徒職員及新入生父兄一同着席するや七宮校長は莊堂の調を以て訓辭を陳べ三學年生川口勇次郎二、三學年生を代表して歡迎の挨拶を述べれば新入生總代矢島清海宣誓の辭を朗讀し次ぎに新入生の父兄を代表して廣瀬氏の挨拶ありて十時閉式せり入學者氏名及本籍左の如し
西筑摩郡 矢崎 清海
山梨縣 小澤 安親
山梨縣 細窪 友一郎
上伊那郡 下嶋 俊二
西筑摩郡 池口 福雄
下伊那郡 下平 三雄
下伊那郡 内山 伊那登
西筑摩郡 杉山 義次

- 西筑摩郡 古根 勳
上伊那郡 瀧澤 銀次郎
小縣郡 小林 右内
愛知縣 横井 正守
小縣郡 内田 新之助
下伊那郡 片桐 英雄
西筑摩郡 今井 徹郎
群馬縣 土井 薫一
西筑摩郡 井上 寛一
西筑摩郡 征矢 三郎
愛媛縣 星加 正雄
西筑摩郡 和田 實也
更級郡 大久保 猪三郎
西筑摩郡 三村 田謙藏
東筑摩郡 上條 武雄
三重縣 松尾 廣次
西筑摩郡 三村 善三
西筑摩郡 北川 春三
西筑摩郡 廣瀬 運平
西筑摩郡 唐澤 繁夫
福島縣 月田 喜代佐
西筑摩郡 嶋田 德之助
愛知縣 伊藤 俊夫
埼玉縣 渡邊 隆知
埼玉縣 上田 藤平
埼玉縣 志津 幸祐
更級郡 林 正森
西筑摩郡 原 正次
西筑摩郡 今井 忠雄

- 石川縣 濱 眞作
上伊那郡 小松 義三
上伊那郡 藤澤 三郎
西筑摩郡 岡庭 泰平
諏訪郡 伊東 厚亮
西筑摩郡 日野 櫻亮
西筑摩郡 西村 卯三郎
山口縣 原川 只一郎
愛知縣 梶田 實治
上伊那郡 中坪 甲子雄
岐阜縣 伊藤 芳郎
高知縣 近森 良材
三重縣 横矢 徹
東筑摩郡 藤澤 甲子十
西筑摩郡 奥村 安太郎
西筑摩郡 加藤 七藏
上伊那郡 木下 武夫
西筑摩郡 丸山 林一
岐阜縣 西尾 彰
○本年四月の卒業生にして奉職地決定せるもの左の如し
三井物産會社林業部(岐阜縣)田近善右衛門
秋田縣毛馬内小林區署 東原 智
秋田縣大館小林區署 近藤 幸吉
帝室林野管理局 都竹 武次郎
同 上 丸山 岩吉
同 上 今井 眞二
秋田大林區署 松澤 敏男
高知大林區署 大森 悦

過日僚友某氏と會談す談遇々元當所設計部技師長たりし○○先生の奇行談に及ぶ○○先生は明治五六年頃佛人ラロツク別子銅山に來り東延斜坑の設計をなせし時通辯として住友家に入り後佛國に留學し歸朝後尾銅山に行き又住友家に舞戻り技師長となり四坂島製練所の大工事を完成せしめ後退身して目下悠々帝都に餘生を送られつゝありとのことなり語るは當所の白鼠談抑揚に富み甚だ興味あれば此處に掲ぐ只惜むらくは余が文章の拙劣なる此の興味ある先生の奇行談を充分諸君に傳ふる事を得ざることを

○○先生の奇行傳

○オ！○○先生かね實に珍らしい人であつたよあの先生には永い間使はれたから随分種々な奇行珍談を見たり聞いたりして知つて居るよ、マア！記憶を辿りてポツポツ話すから氣永に聞き給へ(聞いたまゝに書けば永くなるから所々簡略す)。

○旅宿の茶代は普通人は壹圓とか貳圓とか或は五圓とか拾圓とか極めてあまり端下をつけずされど先生はかゝる簡粗な頭にあらざれば如何なる方法にて割出すか七十二錢三厘とか二圓八錢七厘とか四圓一厘とかの茶代を置く謹で茶代算出の方法を案するに宿泊の數に或る系數を乗つ疊數と待遇率と女中の別嬪率との和を乗じて平方に開くと云ふ様な二次方程式によるものなりと

○だから旅行中の雜費の頭割に至りては嚴正驚嘆に値す腰掛に五錢置き渡船に一錢赤帽に三錢と一々記帳し同勢の數によりて平分し厘以下を四捨五入して決算す支拂を忘るゝ人あれば顔を見る毎に注意し決して部下たりと雖も此の割前をのがるゝを得ず

○手紙を封じて後に上より押へて見撫でゝ見すかして見て確に封入したるを認め次に宛名を書き後に何國何郡何々何某殿と讀み裏返へして己の住所姓名を讀み三たび机の上に置て筆の尻にて一字宛突て讀み誤りなきを確認してはじめて給仕に投函を命ず但し餘り注意して讀みし爲に切手を忘るゝことありとは人の悪口ならん

○給仕命を受けて歩むこと三歩オイ一寸待て給仕振り向き何ですか今手紙をわ前に渡したなハイ受取りました確にお前は受取つたなハイ確に受取りましたよ早く出して來いと云ふのが例なり注意の程敬服敬服

○旅宿に泊りて朝起れば掛蒲團を一枚々

々検査して落し物なきを確め次に敷蒲團を兩手に持上げて四五偏振り試みやつと安心す吾々凡人は此注意なき爲め長旅にては揚子を落し手拭を落し錢入を落し帽子や傘まで落すには閉口す

○先生の設計は安全率甚だ大なり曾て大學教授渡邊工學博士四坂嶋を參觀して島の一角に煉瓦壁嚴重なる一構を見アレンハ火藥庫ですか案内者曰く否大國様の社ですイヤ之は堅固だ外國軍艦から砲撃を受けても大丈夫だらうが神様も息がつまりて窮窟らしいと

○人間は平等なり禮讓は何人に向つても差別あるべからずとは先生の持論なり家に歸れば母堂細君は勿論下女に迄叮嚀に叩頭して唯今歸りました下女其の時該には隣家の下女を招きて此の鄭重なる態度を見せしむ隣の主人は腹の周圍四尺三寸の肥太漢なり其細君自家の下女を戒めて曰くお前も内の旦那が腹が大きいと隣の下女に見せてはいけませんよ

○先生は四坂島にあり夫人は新居濱にあり消息甚だ勤む一日もかくことなし無事なれば無事と報ト書くことなれば書くことなしと書く切手代も容易ならず其夫人に忠義なるは蓋し天下第一なり一年に一度か三年に二度位しか父母の安否を息はない僕などは實に汗顔の至り

○或人おべつかに先生の茶讓さんを譽て曰

くお父さんに似てた美しいこと先生怒つて曰く僕に似れば美しい筈はない其人狼狽すかさ氣は知らねど己惚はなかりしと

○一夜某氏の住宅の前にてモシ／＼モシ／＼と頻に連呼するものあり何人の來訪かと細君がガヲリと戸を開けば道路に立てる先生は叱驚仰天初めて夢さめたる如くヤ一之は失禮しました電話をかける稽古をして居たので御宅を訪ねたのではありませんと大に恐縮してコソ／＼と去る考へて見れば先生始めて架設せる電話の成績如何を氣遣ふの餘り幻覺を生じ道路にて稽古したるものならん熱心感服の至り

○失禮ながら餘り揚がらざる風采に狐色のフロックコートを着用し下駄を穿く其理由に曰く春廣は流行ありて久しく用ひ難たれどもフロックコートは一定なり且つ新らしきを禮服に用ひ其古を常着に用ふる故非常に便利なりと而して先生はフロックにも赤流行あるを知らざるものゝ如し

○俸給を受ければ直に大聲を上げ數へて始む曰く一枚二枚三枚……之は御母様に小遣一枚二枚三枚……之は妻に小遣一枚二枚三枚……之は食料衣服料交際費何々費と明瞭に分類して机上に並べ整理す故に同僚は勿論給仕小使迄も先生の經濟に通ずるに至れり

○一日先生机に倚りて金の不足を嘆す傍人曰くあなた如き高給を受けて(先生當時

の月俸は三百圓年額賞與共に約六千圓不足はありますまい先生曰く否マア聞きなさい私の俸給何圓の内小遣何圓母に何圓妻に何圓食費何圓郵便貯金に何圓銀行貯金に何圓何々何圓ソレ御覽なさい殘は無いでしよ

○先生就床前には火氣の残りあるを氣遣ひて竈の下に手を入れ灰を撫で廻すこと數回灰が眼や鼻に入りてクジヤミが出るも頓着せず世人の多くは此の注意なきため時々夜中に火事だなど大騒をすることがある

○或る日隣の細君今治より歸りて名物鶏卵饅頭を先生の嬢さんに土産として送る半分計り食つた時に先生歸りて見付たり平生贈答を禁するに貫ひたるは不都合なりと大に叱り母堂細君共にあやまりても聞入れず大聲四隣を壓す隣の細君聞きかねて食殘の饅頭を持ち歸り先生の怒はじめて止む但し己に食ひたる分を辨償せしや否やは聞洩せり

○先生は土用中もフロックコートを着用して奔走す某氏曰く夏フロックコートで働くは随分暑いでしよう先生言下に答て曰く大坂夏の陣に鎧を着て戦をました流石の某氏もアット敬服して開た口の塞らざること三十分

○先生平生金錢に綿密なるに似ず理髮屋にては鬚剃には五十錢刈込には三十錢洗ひには二十錢を投出す其の理由に曰く何より大

切なる顔を粗末に扱はれぬでも付て細菌侵入の原因ともならば取返しは付かず壹圓は甚だ安しと成程

○今治港の旅館吉忠に泊る朝の船出を氣遣て裸で梯子段を飛下る未だ時間ありと聞く安心して上る次にシャツ一枚で再び飛下りまた船は出ぬかカラを付けて三度び飛下りまた大丈夫かゾボンはいて四度び飛下りもう出るかと他の客の笑などは頓着せず若し出るぞ聞かば裸でも飛下りたりしならん

○竟に満たざるものあらば馬鹿々と罵倒して省みず相手の誰たるを問はずして馬鹿々々の連發を喰せて相手が退却するも猶止めず退出の途中も尙止めず家に歸りて飯を食ひながら思出しては猶馬鹿々々此の馬鹿々々には辟易せざる人なかりしと

○刻煙草入れと短き煙管とビスケット一袋とを小風呂敷に包みて袖に入れ他家を訪ふ談話中ビスケットを出して獨り食ひお食いなさいとも何とも云はず蓋し煙草も菓子も共に口の慾にして甲乙なければ他人の家に持參して食ふも別に怪しむに及ばざるべし

○事業上の意見を述べらるには渾身の精力を集中して無二無三に猛進す其熱心感服に堪へたれども熱心の餘り他人の言は耳に入らず邪でも非でも押通さんとて駄々を捏ねることあり或る日某支配人遂に持て餘して止むを得ず先生を室外に押出し内より戸を

締めたり先生廊下に地團駄を踏み己の力の及ばざるを嘆す

○食物は毎日蛋白質何々脂肪何々を含まざるべからざることを生理書より學び之より計算して一周間飯何杯汁何杯卵何個云々と規定す若し旅行等にて其規定に従ふ能はざりし時は毎週の終に精算して不足の卵數個を突然呑み女中の目を丸くせしめたること屢なり

○獨逸人其新居濱工場視察の時某支配人案内して獨逸語の説明流暢を極め聞く人皆感嘆す先生曰くナニニ獨逸に九年も十年も居りや乞食でも獨逸語は出来る聲高くして副支配人に達するとも意とせず

○煙草は先生大好物なり宅にありては刻煙草を煙管に詰め火を付け一口飲みトんと叩き詰め飲み叩き詰め飯み叩き其手早きこと目にも止まらぬ早業なり勤務中は敷島を三四本一度に火を付け一度に口にくはわボカ／＼飲みもつて奔走す他よ／＼之を見れば先生烟の影にて見へぬこと時々なり或人先生に尋て曰くあなた一日に煙草を何程召し上りますか先生答て曰く刻百々に卷七八つッ

○藝者の御祝儀は壹圓と間違へて五圓包むも唯も取戻したるを聞かず之は災難とあきらかむべき不文の憲法なり先生にありては然らず斷々乎として自己の權利を主張し談判遂に勝利に歸したりと云ふ先生にありては

御賽錢に二錢と間違て五十錢抛込むも亦神様に談判して取戻さんこと請合なり

○財布をポケットに入れては上より何回も撫で廻して間違なく入れたるを確め尙時々思ひ出して撫で、見ると云ふ御注意はさることながら拘摸に金の所在を發見さるゝ恐あらん

○悪口は随分有名なり少しく懶けるを見れば「アイツヌスタ」成程主人の俸給に衣食して油を賣るは祿盗人に相違なし僕が勤務時間中に而も店のペンやインキを使つてこゝんな原稿を書きつゝあるのを見られれば彼奴は盗人やの連發に逢ふは疑なし然し他人の雑談や煙草の閑に書くものなれば何卒勘辨せられたし

○大々事の製圖設計監督如何に多忙を極むるも必ず自ら手を下し一些事も曾て他人に任せず日夜眞つ黒になりて奔走し一身にして技師長より職工までを兼ね粉骨碎身の實を現はす精力主義の權化にして俸給に衣食するもの否吾々現代青年の好摸範なり學は嶺山機械土木を兼ね語は英佛獨に通じ眼光微々入り精を極め異常の英才曠世の偉器なりと英才時々奇行あるを免れず蓋し英氣の發する所眼中人なきが爲なり奇行如何に滑稽なるものあるも英才に對する尊敬の程度を減することあるべからず諸君此の意を諒せられ僕亦此の偉人の奇行談を聞く毎に腹をかへて謹で敬意を表す。

(三月十一)日鬱陶敷き春雨の音を聞きつゝ

誓程一千日 (二四)

在長野市 高 樋 生

山岳の信州も里近き野山の雪は日に影薄く只浮きくする頃とはなれり遠き四週の日岳上を滑り越せし風の痛く肌を刺すは之れ春めけるを告ぐるもの頃日に至りて吾も人も云ひ合はせし如く二十五萬圓の大建築物の窓より外の風物を賞すなり早や三月も終へんとする乎

○頓狂兄 大々の御讀辭少々恐縮せざるを得ないよーソシテ時々美龍の畫ハガキ感謝に耐へない本月初旬の數枚も確に頂戴したがつ遂い思ひつゝも失禮した併し兄の度量は決してコンナ事を咎められざるを喜ぶ三獸七人の琉球島の珍聞誠に面白かつた華の都の長野市などに上品な生活をして居る好紳士には御伽噺位に聞へて愉快だつた 夫れは少し愛嬌だがマゝ怒らなで續々願ふチー君!

○杉本君 君と僕とは毎日腰辨を提げ込む役所は僅に三町許しか離れちや居ない時々電話口へ呼び付けて貰ふし、歸りがけに餅食ひに寄つても呉れるが茲には皆にも聞かせたい事があるから仲間入りさせざるが夫れは斯ふだー
君は近い内に増俸の恩命に預る相だチー萬歳々々聊か美望が無いでもない中休みを仕ないで一足飛びに四十圓つてか……併し

君のホラはホラさりが在校時代よりサエて来た、ソシテ中々人の見るとは反對に綿密で忠實だよ其点は僕が保証もするし感心もするマゝ大に自重すべしだ、だが年俸一千圓てな辭令を握つての祝辭で無くては同じ祝辭にも値打が少くない、君はドー思ふ

○各地蘇門會の摸様も随分散見した林友に忠實なる投書家に感謝す希くは此心掛を以て引き續いて各地林友の消息を報せられん事を

○又四十余名の弟分が活社會てふ苦界へ身を投ずる由一面御芽出度いと云つて置くが其實之れからは試験時の様な希望ある苦痛が棺に納まる迄續く譯だから同情に富める先輩の鞭撻は之れを拜謝して努力するがよい吾々も微力ながら片肌脱いで見るから、人は眞面目と勤勉とを愛する此の心掛けを忘られざるを切望す僕は此機會に於て赤裸々に告白するが現社會は半々感情から成つて居る若輩の小僧が一人前の顔付をするのは誰れもが嫌惡する云ひ換へれば人倫五常の道は昔も今も變りがない、僕は先輩に對する禮を知らない様な片輪は斡旋する勇氣が無い夫れは活社會から直に葬むられる人種であるから今長野縣廳に居る服部、久保田、渡邊、白井、の諸君は學校出の諸君の摸範とする資格は有るから見習うがよい、此四名の先輩たる僕は毛色が違ふからウツカリ眞根をすると讀書辭は良いが月給は上

らんから念を推して置く阿々。

三月十一日地方森林會番外席より歸りて

誓程一千日 (二五)

會 山 子

此世をば我世とす思ふ今よりは

野邊の縁の萌ゆるからには

臥龍脊鱗中に只見る白皚々たる山嶺身を刺す朔風に踞踏幾閱月の身も今日よりは詰且輕装して山野万象の萌出する間に馳驅して冬間の蓄積を傾例實施せんとす嗚呼思ふだに壯快禁じ得ざるなり

此時に方り懷舊の念勃然として湧くものは同窓生中早世者に對する憐愍の情と彼等在世當時に於ける面影の髣髴となり今年にせる林友誌第六十五號を視るに我同級中村君の名譽ある戦死を第一とし第二期出に七名の死亡ありしには今更の如く驚かさざる能はず、彼等の多くは在校當時の我親交者なり思ふて茲に至れば轉々三嘆而して第三期出の四名も相識の間柄以下七回迄は二名乃至三名の死亡者ありとは誰か是一片悲哀の情無きを得んや

而して茲に尙一つの告ぐ可きあり曰く劍道の師小野派一刀流の達人今井佐十郎師の逝去即ち之れなり、師や開校當時擊劍部の師範として能く七十歳の高齡を以て鑿鑿我徒青年十三四名を連續的に竹刀三寸の尖端に

翻弄し金鐵の以て我が古之士の概を示されしに去る二月二十二日八十三歳を一期として白き木牌に正克院劍道宗範居士の數字を留めて今は亡き人の數に入らる、余は本日時の擊劍部員を代表して親しく師の墓前に追悼の辭を述べたるを報告し併せて同師易實に付き知る無き諸君に一言報ずる所あらんとす

○倉澤君 君も福嶋縣で意氣衝天の概が有るつて結構々々聽かん氣の小僧……イヤ紅顔の美少年だと思つて居る間に二人の父サンだつて書生論もヤレル時にヤルがい、臆面もなく書生論の出来る時が人生の華だよ、吾々の様に成る可く内容の充實した眞摯的なソシテ上官の採擇に値する穩健なる主張で無くては却て己れを損する様になり思ひ總て保守的に傾くは先の問へた事を意味するものだ……況んや非禮や暴語や昔の夢だ、希望に富める倉澤君母校の名の爲め且つは將來の爲め夫れ自重せよ

○東京歸りのエセ紳士! 瀟洒たる小才子肌近來の氣障男として吾人の唾棄に値す、人倫道德凋落の風儀社會の全面を覆へる現代に抗して健實なる思想と健康とを理想として立つべき豪傑會のプログラムを紹介するの光榮を有す

時は四月の某日一永き冬籠りより脱して將に全信州八百三十九方里の彼地此地に離散活躍せんとする一楸に應じて親護りの自

動車に鞭して參集せらるゝは長野縣廳内は林務課御在勤の服部、變竹久保田洋舟、渡邊縣里日井南安の諸名士、是等名士を迎ふべき會場は更に金錢上の關係を持つには非ざれども嚴に紅粉の媚姿を避け俗腸を清くする本會の主旨に基き特に諏訪町なる會山子第二號別荘の階上十一疊の應接室兼圖書館兼寢室をぞとされける、當代紳士の愛遇を受くる身の土浮凌ひの暗夜鍋も憚る有りて牛肉鍋に集議一決せり、七ヶ月の第四號に肩意氣の舊夫人は此奇襲に服くなり且つ蒼くなる子守兼女中は肉屋と酒屋へ走る……調理一交酌一飽食一快談一なが先生にあらねば刺身の手摺みは遠慮せり! 斯くて快哉を三唱四唱せる豪傑の面々は各自の本邸別荘へ石車を走らせらる而して來る紅葉焚く頃の再會を約して縣政の爲めに奮勵すべき樂しき素地を造りて南北に膝栗毛に鞭つ事とはなれり、嗚呼此種の快報各地より寄せられて欲しきものなり

四月十日木曾通過の夜松本市にて

たわごと (承前)

大 樹 小 人

俗語に「ママにならぬとた櫃を投げりやうこらあたりはママだらけ」と云ふがある道長卿はいざ知らず儘にならぬ事多きは世の常だ悲觀するにも及ぶまい人間萬事は悟り

